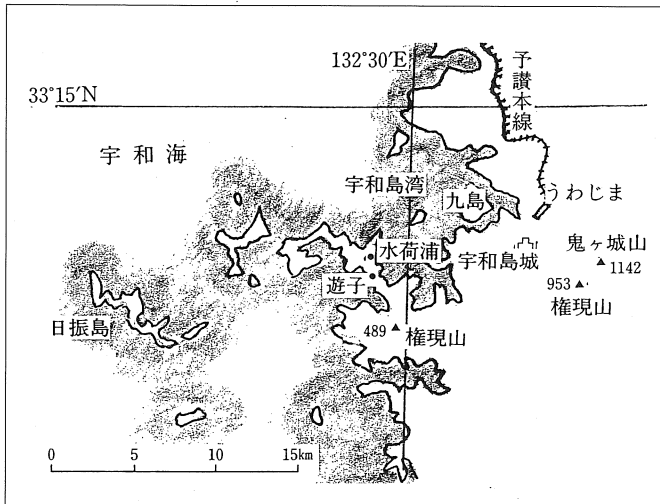


水 荷 浦 の 段 々 畑

宇和島市役所産業部農林課



この地に限らず、江戸中期以降は沿海部・島嶼では人口の増加がいちじるしいが、甘藷の普及により食糧が安定供給されるようになったのが大きな要因で、この優れた作物の増産をはかるためにも段畑は拡大している。

第二次大戦後はこの地も食糧不足となり、甘藷などの増産のため新たに段畑の造成が行われたが、一時的な現象であった。なお、段畑が発展した理由として、江戸末期に耕地の害獣であるイノシシが減少したこと、広大な山林を所有していた網元、村役人層の没落にともなって山林の解放が進んだことなどもあげられる。

現在宇和島市水荷浦の段畑は宇和島24景の一つに数えられ、全国土地改良事業団体連合会の農村百景にも選ばれている。

2. 段畑の構造

段畑は勾配が40～45°の場所が多く、高さが300mに達するところもあった。構造は所有者によって多少異なるが、当地の代表的なものは図1のとおりである。

作物を栽培する平らに均されたところをアゴといい、土壌の深さは10～30cmくらいで、その先端部分はアゴ鼻とよばれ、ここには甘藷の蔓を巻き、盛土してアゴよりも高くし、

1. 段畑農業の発展

宇和島市は愛媛県の西南に位置し、西は宇和海に面して天然の良港に恵まれ、昔から漁業が盛んであった。いわし網漁はその中核であったが、伊達政宗の長男秀宗が元和元年(1615)10万石の碌をもって宇和島藩に封せられ、漁業にはその1/5を租税として賦課して藩の財源とし、ために藩の保護のもと新浦が形成され、漁業の振興がはかられている。

この地は平野に乏しく、漁村での食糧自給のための農業は段畑を造成して営まれ、藩祖秀宗が入封した頃にはすでに開かれていたが、二代宗利の時代には積極的に開墾がすすめられ、段畑が増加している。

藩政中期以降は漁業人口が増加し、その食糧確保のために自発的に開墾が進められ、明治以降は山頂にまでおよぶようになった。

土壌の流亡を防いだ。

岸とよばれる垂直部分は石積みとするのが理想ではあるが、石の確保、人手が必要であり、この地の決して豊かでない耕作者にとっては、石工職人を雇う余裕もなく、石積みの段畑をもつことは容易ではなかった。

しかし、収穫を増やすためには少しずつでも石を拾ったり、家族を挙げて暇をみては大人も子供も石をかつぎ上げたりして、石垣を築いたものである。

石垣を築く様子が歌い継がれている。「父が石破り 童が運び 爺が築く 昼餉の芋に母の温り」。昼の食事にふかした甘藷を母が山にもって行ったが、現在のように保温器具もない当時、わずかに温りの残るいもを、車座になって食べたのである。

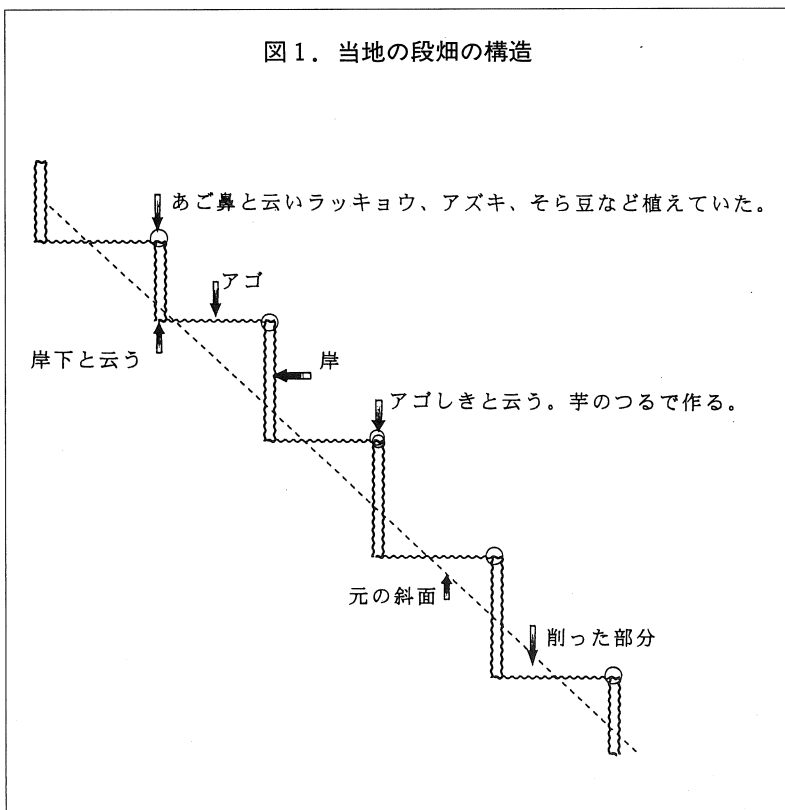
水荷浦の入口には「耕して天に至る」の看板が立っているが、これは明治時代に来日した清国（現中国）の政治家李鴻章（^{りこうしょう}1823～1901、日清戦争講和時の清国代表ともなる）が段畑の様子を見て、このように評したのが、はじめりのようである。夕暮れに、空に星が輝やいているときなど、段畑は空まで続いて見える。

3. 早掘馬鈴薯の導入

現在段畑の残る水荷浦は、海に突出した幅

の狭い、急峻な半島の中央に位置し、その地名は、昔から水がなく、他の地域から荷って運ばなければならないほど水に乏しかったことに由来している。乾燥した土地に適する作物としては甘藷と麦があげられ、長い年月この両者の繰り返し栽培が行われ、近年になって県下の温暖な海岸、島嶼で柑橘の栽培が盛んになったが、あまりにも水はけのよいこの地は柑橘栽培にはかならずしも向いておらず、甘藷、麦にかわる乾燥に強い経済性のある作物の導入が求められた。長い間主作物であった甘藷も、昭和30年（1955）頃より頻繁に襲来する台風と塩害のために減収することが多く、またこの頃よりドブネズミが異常発生するようになり、年によっては3分作からほとんど収穫皆無の全滅に近い害を被り、もとも

図1. 当地の段畑の構造



と豊かでない地区の農漁民は貧困に苦しめられるようになった。

この頃、従来からの甘藷、麦にかわる経済作物である早掘馬鈴薯を入れてはどうか、と計画された。甘藷、麦はもともと価格が低落気味のところへ、さらにネズミの害を受けたため、その栽培面積は激減し、また柑橘にかえることのできない場所は耕作が放棄されるようになってきたため、早掘馬鈴薯の導入には大きな期待がもたれた。

段畑の下の平地は気温も高目で畑の水分もやや多く、ここで出来る馬鈴薯の味は決してよいとはいえないが、段畑ではたいへん味のよいものが収穫される。段畑は石垣で囲まれている、石は昼間太陽の恵みを受け、夜になってからもその熱が残っていて土が冷えすぎるのを防ぐことができ、平地とくらべて昼夜の温度差もある。また馬鈴薯は霜、雪の害を被りやすいものの、段畑が保っている熱のために雪がとけるのが早く、被害を避けられることなども、よい味のいもを安定して生産できる要因となっているし、他の産地のものがまだ市場に出回らない時期に収穫、出荷できるのも有利である。

このようにして、この地区の特産品となった早掘馬鈴薯は、昭和43年（1968）国の地域特産農業推進事業に指定され、水荷浦、遊子、下波地区での栽培面積は120ヘクタールに達した。

また、この頃各地で盛んとなったマルチ栽培は、昭和46年に水荷浦で25ヘクタールにとり入れられたが、畦を覆って地温を上げ、発芽を促進し、ためにいもの肥大をよくし、結果として良質の馬鈴薯を3割方増産する好成績をおさめるにいたった。

4. 高齢者の信念と力

昭和50年代になると、高度経済成長のもと各地の農漁村の高齢化は進み、この地域の多くが真珠とハマチ養殖をはじめたようになった。段畑では機械を用いての耕作はできず、土手、石垣の維持、除草、運搬など人力作業によるほかはないが、厳しい労働は若い世代から敬遠されるようになり、一時の景気で柑橘を植えたところをはじめ、多くの段畑が次々と耕作を放棄されるようになってしまった。反対に都会の景気がどんどんよくなり、農業業に見切りをつけて出稼ぎする者が多くなり、家には女性と高齢者だけが残る過疎の地域となったが、その女性たちもまた真珠関連の仕事を求めるようになった。

芸術的というべき段畑は、このようにして次第に耕作されずに荒れていったが、現在宇和島市で唯一水荷浦の段畑で耕作が続けられ、景観を保っている。当地の高齢者の言葉はまことに印象的である。「段畑はつまりませない。倍の働らきをしても半分もできない。ただ畑を荒らしては先祖にすまぬと思ってしてるんですらい」。段畑の仕事からは豊かさは生まれてこないものの、この高齢者たちの信念と努力で、先祖が築き残していった大切な財産を守り通し、いまでも変らない美味しい早掘馬鈴薯がつくられている。

現在この早掘馬鈴薯と段々畑の描く見事な縞模様は、訪れる人たちの注目するところとなった。海から100mの頂上まで積み上げられた石垣を見て、どこからどうして運んで築いたのだろう、と皆感じ入り質問をするが、派手さはないながらも先祖が営々と築いた愛媛県のピラミッドに誇りを覚えるひとときである。